

研究ノート・平和論を開講するため

多賀秀敏

はじめに

一九八三年度から「平和論」と題する講義を開講する。全国すべての大学のカリキュラムを体系的に調査したことはないので、はっきりしたことはいえないが、「平和論」(ないしは「平和学」)を講義課題にかかげる大学の数はきわめてかぎられている。

四国学院大学では、すでに一九七六年から「平和学(Peace Studies)」と題する講義が、岡本三夫教授(現日本平和学会副会長)によって開講されてきた。ここでは、年間のわりあて時間の三〜四割を費して、平和学の誕生、展開、制度化などが講じられ、のこりの六〜七割の時間は、四名程度の学習グループにわかれての自主学习、共同研究にあてられているという。

平和科学研究センターを擁する広島大学でも、総合科学部において、一九七七年から総合コース「戦争と平和に

かんする総合的考察」が、山田浩教授を責任者として進められてきている。そのほかにも、広島大学では前述平和科学研究センターのスタッフを中心に「平和学Ⅰ・Ⅱ」が講じられて⁽⁴⁾いる。

筆者の知るかぎりでは、過去数年間、定着した平和論の講義がなされているのは右のふたつのみである。⁽⁵⁾このように、平和論は日本の大学の講義としては新しい学問分野である。それを講ずるにあたって、しかも半年というかぎられた期間で能率よく行うためにも、受講生にあらかじめ手がかりを与えることが望ましいと考えている。

そのためには、当面の新潟大学における平和論の視点の開陳から、そこでとりあげる諸問題を考察するうえで不可欠となる資料までが、ワン・セットになった入門用テキストが望まれる。戦争・軍備・軍縮、南北問題、環境問題などを、歴史的、実証的に検討考察しうる資料集があることが望ましい。社会的に不正、直接的・構造的暴力、人権、平和の思想史、人間的価値について議論するための共通のリソースがあればよいと思う。本稿の目的は、そのさわりを紹介することにある。

(1) 川田侃「会長に就任して」日本平和学会編『平和研究』第一号(一九七六年)一五頁参照。なお、川田侃『自立する第三世界と日本——現代における平和の構造』(日本経営出版会、一九七七年)に再録、五三頁。

(2) 岡本三天「大学紹介——四国学院大学文学部——平和学の実験」日本国際政治学会ニューズレター委員会編『JAIR NEWSLETTER』No. 19(一九八二年)四〇五頁。

(3) 広島大学の学内措置により一九七五年八月発足。一九七六年から『広大平和科学通信』を、一九七八年からは『広島平和科学』をあわせて発行している(ただし後者はタイトルは一九七七年から)。学内措置にもかかわらず、広島大学の平和科学研究センターが、日本の平和研究のひとつの中心として、この分野をリードしてきた足跡は高く評価されよう。

(4) 山田浩「私の講義」日本国際政治学会ニューズレター委員会編『JAIR NEWSLETTER』No. 17(一九八一年)四頁、六

頁。なおこの総合コースで使用されたテキストは、山田浩・森利一編『平和学講義』（勳草書房、一九八〇年）となった。
 (5) ただし、内容において平和学だという講義は多数あることはつくくわえておかなければなるまい。たとえば、岡山大学の外国人講師である Glenn D. Hook は、英語の講義ですら平和教育の実践になりうることを示唆している。グレン・D・フック「平和教育の教材としての S・F・L」『岡山大学教養部紀要』第一八号（一九八二年）、同「平和教育の新しい方法——国際政治学の教材としての S・F 小説と映画」『日本平和学会編『平和研究』第七号（一九八二年）、実際の教材として Glenn D. Hook ed. *International Political Science Fiction*, (鶴見書店、一九八〇年) をあわせて参照せよ。一九八三年二月一日付『毎日新聞』家庭欄によれば、神戸大学教育学部でも、昨年十月から「平和教育」講座を開講したという。

そのほかにも、国際関係論、国際政治学をかかげながら内容はこれまでの平和研究の業績の提示であるケースは数多い。また、制度的な面では、長崎総合科学大学に、「長崎平和文化研究所」が一九八〇年から大学の公認の施設として発足しており、一九七八年以来『平和文化研究』を発行している（具島兼三郎「大学紹介——教育・研究の現状——長崎総合科学大学」『日本国際政治学会ニューズレター編集委員会『JAIR NEWS LETTER』No. 21（一九八二年））。創価大学には、「創価大学平和問題研究所」が一九七六年に設立され一九七九年から『創大平和研究』を発行している。さらに、「日本平和研究懇談会」は、一九六六年から活動しており一九六七年からは、欧文の *Peace Research in Japan* を発行し、一九七三年に設立された「日本平和学会」は、一九七六年から機関誌『平和研究』を発刊して、五〇〇人を優にこえる学際的学会へと成長している。

平和教育としての平和論

平和論の目的は、単にこれまでに平和学・平和研究の分野で蓄積された知識の提示・伝達や、なにがしかの技術の習得をもってよしとするものではない。教師の側からすれば、平和論は、断じて平和教育の一環である。平和を

価値として科学的に探究し、かつ社会的に追求しうる人間を育てなければならぬ。同時にそれによって、少しでも社会全体が平和価値の実現に向って進むことをも期さねばならない。そうである以上、平和論はお題目ではなく、実学であり、またある場合には、部分的に人格形成にすらタッチせざるをえない。平和への強固な意志をもつた人間づくりが目的のひとつともなりうる。

これまでわが国で行われてきた平和教育には、ふたつの特徴があった。第一は、その主たる内容が、戦争・原爆の悲惨さをしらしめることにあり、そこから、二度とこうした目にあわないようにするには、どうしたらよいかを受講者に考えさせることを目的としていた。⁽¹⁾ 別ないい方をすれば、第二次世界大戦で、日本人がなめた悲惨な体験の伝承を核にすえてきたといつてよいだろう。無論それだけではなく、そこから出発して、日本の侵略によって日本人よりひどい目にあつたアジアの人びとにまで視点が及んできたのはいうまでもない。

第二の特徴は、この対象が、弱年層に向けられてきたという点である。平和教育と銘打つたものが、初・中等教育の場で展開されてきたことは大きな特徴である。年齢的に、低いということは、「鉄は熱いうちにうて」の俚諺通り、人間形成そのものを目標としている。

ひるがえって、高等教育で、平和教育を行う場合はどうか。おのずからそれなりの特徴をもち、さらに、これまでの教育の経験や反省のうえに立っていないければなるまい。第一に、内容は、戦争の伝承だけではなくより積極的な平和秩序の創出につながるものでなければならぬ。紛争解決の手段として制度化されてきた戦争の神話をあばき、それに代る平和的制度の創出と、同時に、戦争の巨大なかげのもとで見落されがちであつた不平等・不公正にかかわるさまざまな問題⁽²⁾にまで視野を拡大しなければなるまい。

第二に、すでに約一五年前後の教育をうけてきた者に対してする「人間形成」とは、一・二年すれば、社会へ

出ていく人びと、すなわちすでにこの社会で参政権をえている人びとを対象にしているということをおかねばならない。民主主義社会において平和価値の実現にむかって有効な活動のできる人間の育成である。そこで要求される資質には、知識や技術を基礎にした労働を媒介に社会に貢献しうる能力や協調性のみならず、支配や時流などさまざまな社会的拘束に抗してノンといつて抵抗できる強固な価値意識を形成・維持し、そこから物事を考察する能力をもふくまれる。高等教育における平和教育は、後者のための、学校教育の場での最後の瞬間のダメ押しである。教場という面では実社会から隔離された空間でなされる、創造性(構想性)、批判性、想像性、学・国際性を養う、最後の学習過程と位置づけざるをえない。

そうであれば、教師の側から知識を伝達したり、技術を伝授するのではなく、意識の変革や意欲の惹起をめざした両者のたえざる対話のなかにこそ最大の重点がおかれる。³⁾そのためにも共通の資料・手がかりが必要となる。⁴⁾

(1) 一九七五年九月広島大学で開催された「核と平和」を主題とするシンポジウム(日本平和学会秋季研究大会)で、永井秀明は、戦後日本の平和教育を三期に区分し、一九六〇年代のなかば以降から始まる第三期の中心に、原爆被災体験を伝える教育をあげた。平和教育の今日的意義は、「広島・長崎の原爆体験の原点をふまえ、日本国憲法の本質にもとづいて展開すべきである」として平和教育の三つの目的のうち、第一は「戦争のもつ非人間性や残虐性を具体的な事実にもとづいて子供たちに把握させることであり、同時にその反面として、人間の生命がいかに尊いものであるか、また真の平和な社会が実現した場合に、人間の能力の発展する可能性がいかにすばらしいものであるかが想像できるような教育でなければならぬ」(傍点原文)とのべた。永井秀明「平和教育の構造と平和研究の課題」日本平和学会編『核時代の平和学』(時事通信社、一九七六年)二四八、二五一、二五二頁。ちなみに他の二つの目的は、「戦争の原因を追求し、戦争をひき起こす力とその本質を科学的に認識させること」、「平和を守る力とその展望を明らかにすること」としている。同、二五三頁。

(2) 前出のグレン・フックは、「日本での平和教育の例を取り上げてみると、一九五〇年～一九六〇年代の平和教育とは、戦

争・原爆の悲惨さを教えることが目的であり、一九七〇年代に入ってから、段だん平和教育の幅が広がり、開発問題などを取り上げるようになる」としている。グレン・D・フック前出「平和教育の教材としてのS・F・L二〇一頁。

- (3) 越田稜は、教育の現場に潜在・顕在する問題を指摘しつつ平和教育のあり方を問うた論文で、女性を「最後の植民地」とする考えをもじって、教えられる側「生徒を人間社会の「終りのない植民地」あるいはこれに気づかぬ教師を思えば「忘れられた植民地」だととらえ、*「なぞ」「いいえ」*が教えられる側の口から発せられる教育の重要性を説いた。越田稜「忘れられた植民地——『平和教育』に思うこと」日本平和学会編『平和研究』第七号（一九八二年）八四～五頁。フックは、日本の大学では、学生は、講義は出席するだけでよしとし、講義の内容も試験に通過するため以外には利用しようとはしないし、講義は一方的で学生自身の発言や共同研究の機会を与えていないと指摘する。だからこそ学生の認識の変化だけでなく行動にも期待する大学の平和教育では、SF小説やビデオ・アニメなどの教材を用い講義以外の方法であえて学生と討論を重ねていくことが有用だとのべている。フック前出「平和教育の新しい方法」七五頁。また、パウロ・フレイレ『伝達か対話か・関係変革の教育学』（亜紀書房・一九八二年）とくに第二部Ⅲ「伝達か対話か」や、ガルトウングの（平和教育の場には）「直接的暴力のみならず、構造的暴力もあつてはならない」（ヨハン・ガルトウング「平和のための平和を体した教育——それは可能か」日本平和学会編『平和研究』第2号、一九七七年、八七頁）というコトバなども示唆にとんでいる。
- (4) 平和とか、平和教育とかのべてきても、価値としての平和が一義的ではないことは周知の事実である。戦争のない世界から、暴力すべてを否定し、さらに、社会的不正をも暴力のひとつとして考え、生態系のバランスを確保することや、総じて人権の実現された社会まで、平和の概念は拡大・深化している。また、他方では、心の平安に平和を求める伝統もある。このように平和研究・平和教育には肝心の平和とはなにかについてはつきりしないという批判がままある。事実、ガルトウングが、平和とは暴力の存在しない状態であると定義して、構造的暴力の概念を示したときに、その概念があまりにも多くの現象をとりこみあいまいな部分を残していたために「構造的暴力とは、ガルトウングの気に入らないものすべてである」と揶揄された。しかし、このように平和価値が多様であることを認識すること自体が、平和の意識化の第一歩ですらある。

地球人をつくりだす

では、高等教育における人間形成としての平和教育は、具体的にはいったいどのような人間をつくりだすことを目的とするのか。タブラ・ラサのうえに戦争の悲惨さと命の尊さを書きこむだけではたりない。すでに、自分の知識を蓄積し、あらかじめできあがった人格のうえに、さらになにかを書きこむ作業なのである。既存の知識の組みかえをも含む新たな視点と知識の注入といいかえてもよい。

誤解をおそれずにいってしまえば、これまで蓄積されてきた知識に応じた地球人をつくり出すことが高等教育における現代平和教育の最大の目的だと確信している。地球人というコトバは、なにか一見SF的で、ある意味では、人間生まれてこの方だれだって広大な宇宙からみれば、ずっと地球人でありつづけている。なにをいまさらである。

この素朴な見解は、部分的に正しい。「広大な宇宙からみれば」というコトバは、みずからの属する集団を位置づける視点をレベル・アップしたことを意味する。まさにその通りである。われわれは、なんらかの問題を解決しようとするとき、問題の大きさにあわせて視点をつきあわせてきた。問題の身の丈にあった視点によって対処し解決してきたのが人類の歴史である。現在、われわれをとりまく問題は、地球的問題群とよばれている。⁽¹⁾核兵器や通常兵器の無用な蓄積、軍事的視点からのみ物事をとらえようとする態度の浮上、環境汚染、飢餓、資源・エネルギー問題、都市化・精神的荒廃など、どれひとつをとっても、これまで数百年間、最適の問題解決単位と信じられてきた個々の国家の解決能力をはるかにこえる問題ばかりである。⁽²⁾しかも、こうした空間的に世界の各地域・各国家

を密接にからませている問題群が、より空間的に狭い範囲の問題のうえにのしかかって、そこで生ずる問題を解決しようとする場合の大きな阻害要因として、あるいは、問題自体の促進要因としてたちあらわれている。しかも、地球的問題群のどれかひとつでも破局的な進行をみせるとき、他のすべての小さい問題はすべて強制的に解決されてしまうという緊急性をもっている。すなわち人類社会の破滅である。

こうした認識にたつとき、平和教育とは、みずからのアイデンティティを、「地球社会」におく人間を育てることを第一の目的とすることになる。自分が何者であるかというのは、その場その場で相対的である。したがって、地球社会へのアイデンティティを、他のどのアイデンティティよりも、比率のうえでより高く、優先順位のうちより上位におくことといいかえてもよい。

地球人と似たコトバに国際人がある。国と国との間（際）で活躍する人間である。このコトバが高等教育の理念として使われるケースはたくさんある。卑近な例をあげれば、平和論自体、本学法文学部の三学部への分離改組をきっかけとして新設された。その講義の位置づけも基本的には、このコトバの線上にある。「世界の主要な政治的グループの個別的な研究とわが国を含めたそれら相互間の比較研究に基いて）政治理念・政治利害並に政治制度を異にするこれら国家群の関係を政治的關係を中心に据えつつ、経済的文化的關係も視野に入れて分析し、国際的な共存の可能性を追求する国際關係論及び平和論」という短い文章に、知識の伝達面からは国家と国家との關係の学としての平和論という見方が看取できる。しかし、「共存の可能性」というところに力点をおくならば、その政策論の展開において、地球社会の存続という視点がちこまれているのである。その視点から、教育上いかなる効果を期待しうるかを考察すれば当然、地球人の育成はひとつの選択肢として正当性をおびてくる。

国際人をもっと積極的に打ち出しているのは、筑波大学の国際關係学群の設置構想である。それによると「我が

国におけるこれまでの大学教育は、国際性を理想としてうたうことはあっても、必ずしも現実的、体系的に、かつ、国際的に通用する形での国際人教育を推進してきたとはいえない。そのため、国際的次元を持った諸問題に的確に対処できる人材の養成を大学教育において実施することは緊急、かつ、極めて重要な課題と考⁽⁴⁾えらる。ここでのべられる国際的に通用する形での国際人とは、外国人講師や国際的経験のある学者、留学生などを多数受け入れて、英語で書かれた教科書を使い英語による講義・討論を通して、「社会科学の応用面を重視し、現実の問題の質的側面に十分注意を払った政策志向型の教育を行う」ことよ⁽⁵⁾って、育成される人びとのことらしい。

そのカリキュラムには、「軍備管理論演習」「国際緊張・冷戦論演習」「国際安全保障論演習」などがくまれている。⁽⁶⁾国際人とはいったいな⁽⁷⁾なのだろうか。山本満は、日本でいわれている「国際化」に関連して国際人論の一端を展開した。ECと日本との比較を軸に、日本でいわれる国際化は、第一に、国家の相対化とか、主権の部分的委譲という考えから出発しているのではなく、日本の国際的地位や影響力、国益をいかに向上させるかという文脈から出発し、第二に、国家原理との衝突⇨緊張関係が欠落していると指摘した。そこから、日本でいわれている「国際化」は実は国威発揚の別な言い方にはかならず、「国際人」とは、「一言で言⁽⁸⁾って、したたかな交渉者(タフ・ネゴシエイター)」「国際場裡で外国人を相手に丁々発止とわたり合⁽⁹⁾って、日本人の言い分を通し、また利益を守る能力を備えた人間」にすぎないと思うとしている。筑波大の国際人教育も、この文脈で理解しうる。

現代の世界をみわたして、国際人を整理すると、大別して三つのタイプがあると思われる。第一は、生活の場を、自国にのみ限定しては生きてはいけない人びと。具体的には、世界各地にみられる遊牧民などはこの典型であろう。かれらには、先祖代々、かれらなりの生活の場が画定されており、時をへるに従⁽⁹⁾って、それが移動することはあっても、国境にとらわれることはない。主権国家間の国境などあとから追いかけてきたものにすぎない。

東南アジア一帯で活躍する華僑や、環インド洋圏を中心に活躍している印僑などもこの範疇にはいるだろう。タイで生活する華僑は、タイにおいて中国人であることを声高に主張してもなんの得にもならない⁽¹⁰⁾。難民もこの範疇にいれても誤りではないだろう。この範疇に属する人びとは、国境の壁などに閉ざされていたら生きていけないのである。

第二に、よりよい生活を求めて、国境を相対化し、国家よりも高次の社会に対してアイデンティティをよせていく人びとである。ヨーロッパで進行している事態はまさにこの典型であろう。西ドイツの初中等教育の教科書では、自分のことをドイツ人と思わずヨーロッパ人と思う感情を先行させようとしているという。しかも、ヨーロッパでは、国家の遠心力と共同体への求心力との間の緊張関係を残したまま、着実な討議が重ねられている。

第三に、国際的でなければ食べていけないわけでもないし、そうかといってよりよい生活のためだけではなく、国境をこえて能力を発揮する人びとがいる。鉄筋工、鉄骨工、配電工、電工などの職人である。かれらの腕を必要としている国ぐににこわれて出むく。自分の国に働きの口がないためとか、より条件がよいからではなく、他人がよりよい生活をするために国境を通過する人びとである⁽¹¹⁾。商社や多国籍企業、国際公務員などの指導理念も元来こうあるべきである。

これらのほかに、日本型国際人がある。これは、もはや国際人でもなんでもなく、単なる国益人にすぎないことは、山本満の指摘した通りである。

(1) 地球的問題群の噴出については、関寛治「軍縮のための国際平和秩序創出の急務」『軍縮問題資料』No. 12（一九八一年一〇月号）の2～3頁に、国連大学のGPIIDプロジェクトとの関連で簡潔に紹介されている。

(2) この点については、多賀秀敏「第三世界の国際秩序観覧書」日本国際政治学会編『国際政治』69号（一九八一年）一四六～七頁を参照されたい。

(3) 新潟大学法文学部『新潟大学法文学部を三学部（人文学部、法学部及び経済学部）に分離改組する計画書』全訂版（一九七九年）、六四頁。

(4) 筑波大学国際関係学群（仮称）設置準備委員会『国際関係学群（仮称）及び関連大学院について』（一九八二年三月二〇日）「Ⅰ 設置の趣旨」から。

(5) 同右。

(6) 筑波大のこの構想については批判が多い。一例として、社会科学の存在は、批判の学として正当性を発揮しうる所にあるという立場から、阿部斉「社会工学的思考と現代社会」『世界』第四六号（一九八三年一月号）七五頁～九〇頁。

(7) 山本満「日本が国際社会で生きる条件」『エコノミスト』一九八一年一月二〇日号、一〇頁～一六頁。

(8) 同、一一頁。

(9) たとえば「カブールの町をはずれて山間部にはいると、たちまちにして周囲の状況は一変する。一木一草もない灰色の岩山と岩山の間を舗装道路は走っている。まだ七時前後なのに、遊牧民、ジブシーの群れが次々に南下しているのにつかる。大きい集団もあれば、小さい集団もある。ちょうど遊牧民が南の牧草地帯へ移動して行く時期に当たって、いずれもパキスタンを目指しているという。どこで国境を越えるのか知らないが、旅券などというものは必要ないらしい。」井上靖「アフガニスタン紀行」『西域物語』（新潮社、文庫版、一九七七年）一九五頁。

また「……外へとびだしていくと、鉄砲を背中にした見たことのない人がトナカイにまたがっていました。うちの犬たちがさかんにトナカイにはえかかるので、その人は犬をおっぱらおうとしていたのです。わたしは気のどくに思っ、『どうぞ、ユルタの中へはいって、からだをあたためてください。』という、その人はいわれるままにはいってきて、わたしの

用意した食事を食べました。その人の着ている服装とことばづかいから、どこか遠くのほうからやってきたツングース人だということがわかったわ。しかし、この人には、なにかそれ以上のものがあつたの。……わたしは、きゅうに胸がときめきはじめ、ゆうべのふしぎな夢のことを思い出したんです。」ニコライ・カラーシニコフ(高杉一郎訳)『極北の犬トヨン』(学習研究社、一九六八年)三九頁。このどこか遠くからやってきたツングース人の若者と、この情景を語っているヤクトト人の娘とは、二日後に結婚する。おそらく一九二〇年代前後のシベリアを舞台とした話だが、ここでは、「あとから追いかけてきた国境」どころか、生活の場として遊牧民の間で暗黙のうちに設定された境界すら、将来の生活のためのよりよい伴侶をもつためには無意味になっていることが示されている。

(10) たとえば、ヨク・ブーラパー(星野龍夫訳)『中国じいさんと生きる』(井村文化事業社刊・勁草書房発行、一九八一年)は、参考になるだろう。華僑の祖父が孫に中国語でなくタイ語を習わせる場面(二六頁)や、隣人がタイ人の悪口をいうとき、「もし比べるんなら、タイ人とタイ人、中国人と中国人を」比べなければならぬとさす場面(七四〜七五頁)など示唆にとんでいる。

(11) たとえば、「……サウジアラビアで日本の鉄骨工が一人で二十メートルほどのアンテナを建てているのを見たことがあるが、このベテラン職人、英語も全然ダメなのに、着いた当初初めての町でセメントを買い、砂利と砂をどこから調達してきた、一人で穴を掘り、基礎作りから、輸入鉄骨の組み立て、アンテナ配線までキビキビとこなしていた。塔を立てる時は見物している子供を助手に使って、日本語で『引け』『ゆるめろ』と指示し、これが何とちゃんと通じるのだ。鉄塔が立った時は数十人にふくれた見物人から拍手が起こり、出稼ぎ労働者の子供たちが、弟子にして技術を教えてくれとつきまわっていた。

持参した地下足袋をぬぎながら、『仕事は言葉じゃない。体で覚えるもんだから通じるのがあたり前だ。これからアブダビで二本建てて日本に帰る』と彼はこともなげに答えた。(阿)『朝日新聞一九八一年一月一八日付夕刊「社外報」欄「国際人」。

考える手がかり——三つのエピソード

地球人とは前節で分類した国際人でもないし、ましてや日本型「国際人」ではない。さらに、地球人と平和を考える手がかりを提示してみよう。エピソードを三つのべる。

第一は、食料に関するエピソードである。七〇年代から八〇年代にかけてサハラ砂漠の南辺を中心とする周辺部一帯で食料不足による餓死者が続出した。この原因は、「異常気象」であるとか、「ひでり」のためであるとされ、その文脈にそって、「サハラ砂漠の南進」という表現で世界の耳目を集めた。ここにみられる図式は、世界最大の砂漠であるサハラが、南辺部のひでり・異常気象によって南へ向って拡大し、あらたに砂漠化した地域に住んでいた人びとは、食料難に陥って餓死していったというもので、自然環境の急激な「自然」的变化が、人びとを死にいたらしめたという単純な原因・結果論である。

ここで、疑問がふたつわいてくる。第一に、はたしてサハラの南進は自然現象だったのか。第二に、かりに「異常気象」だとしてもこれがもたらした大量の餓死者は妨げることではできなかったのだろうか。

このふたつの疑問については切り離して答えることは不可能であろう。こんにちではさまざまな回答がよせられている。その結論は、人為的に惹き起され増幅された自然現象であり惨事であるというものである。

たとえば、西川潤の分析では、六八年以降この地域の雨量は低下してきていたところに三つの要因が重なってこんにちみるような深刻な事態を招いたという。第一に、各国政府が都市優先政策をとり農村を顧みなかった。第二に、モノカルチャー型の農業のために打撃に弱い構造ができていた。第三に、輸出用の作物栽培・森林伐採・家畜

飼育が緑を激減させたというものである⁽¹⁾。また、坂本義和は、国連をふくむ先進国があげた「ひでり」という通説に反してアフリカの現地の研究者は、欧州共同体むけの牛の増殖と、落花生のモノカルチャー栽培が急速に地味をやせさせたことが原因であると考えているということを報告している⁽²⁾。

もうひとつ考えられる要因は、「オイル・ショック」である。エネルギー源をなにに求めるかについては、おおむね世界的にヒエラルキーが確立されているように思われる。原子力・水力・火力による電力や、あるいは、電力に変換せずに直接煮たきや暖房に用いるガス・石油・石炭・薪炭などの間で、地域によってわずかな特色をもったヒエラルキーが存在している。先進国ほど、都市部ほど、電力やガスに頼る、電力についても原子力発電の割合が高いという傾向が看取できる。

問題は、サハラ遊牧民や、輸出用作物の栽培にあたっていた農民が、なにを燃料源としていたかである。石油・薪炭が主要な燃料源であった。そこに、オイル・ショックが訪れる。これによって経済的にもっとも深刻な打撃をうけたのは、大量に石油を消費する先進国ではなく、開発途上国であったのは周知の事実である。そこでサハラ周辺部には石油がなくなり、それまで石油を使っていた部分を薪炭に切りかえる。エネルギー源のヒエラルキーを一段おりたといえよう。ところが、降水量の低下によりこれにも限度があった。この部分も切りかえる。さらに一段おりた。なにに切りかえたか。家畜の糞である。家畜の糞を乾燥させて、燃料源とする伝統的方法へ戻った。ところが、これがあまりに深刻であったために、家畜の糞がそれまで担ってきた他の機能を奪い去ることになった。草木の肥料としての機能である。そのために、さらに砂漠化が進行するという悪循環が生じた。

ここで、「サハラ砂漠の南進」の原因による影響を、サハラ周辺部にかぎらずに考察してみよう。いったいこれだけの餓死者をだしたほどの「自然現象」が、サハラ以外の地域になんらかの影響を与えずにすむだろうか。もち

ろん、ヨーロッパの肉が値上りするというような一時的影響は目にみえている。地球上の気象は、大気の循環を通じてつながっている。サハラ砂漠化がいつなんどき、他の地域の異常気象をひきおこさないという保障はない。サミール・アミンのコトバをもじれば、ヨーロッパ人が肉を食うために、ヨーロッパ大陸が大洪水や大冷害にみまわれる可能性もあるのである。

さらにもう一点、このとき日本はなにをしていたか。「日本の電力会社グループがフランスの原子力委員会、ならびに先方政府との合弁でウラニウム開発の計画を進めているニジエールで、干害のために五十万人が餓死直前といわれていた七六年の六月ごろ、日本政府は農民の希望に反して、米の耕作の削減を強行したのです。これをやめて、余剰米をニジエールに寄贈したら、日本政府への、したがってぼくら国民への国際的評価は向上したのでありましょう」⁽³⁾。この文章からは、なにがなんでも自国のエネルギーを確保しようとしている日本が、他国の国民のおかれている苦難を横目に、資本と技術とをテコに奔走している姿がありありと目にうかんでくる。現地の国民は、糞までもエネルギー源として使いつくそうとし干害のために一滴の水も惜しい所に、先進国で消費されるウラニウムのために調査隊がやってきたからといって、かれらの調査旅行に必要とする飲料水その他を提供する余裕などありはしないことなど明白である。まさに「ウラニウムなどほらずに、遊牧民の体を燃やしたらよい」のである。

日本の農業政策が、「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認」(日本国憲法前文)し、「いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならない」(同)とした原理、すなわち、この場合であれば、国際的食糧事情に応じてなにがしかの貢献をなすという原理をほとんど考慮せずに、なんらかの別の原理にもとづいて計画・実施されてきたこともこの文章からは読みとれよう。

ここで先にあげた疑問への回答を整理してみよう。サハラの南進の原因は、地味をやせさせるモノカルチャー作

物の栽培、ヨーロッパ向け肉牛の過剩飼育、輸出用木材の伐採である。加速要因あるいは触媒が、「ひでり」やオイル・ショックである。餓死者を増大させたのは、現地の都市優先の開発政策や、日本をふくむ他の諸国や当の現地政府の救援の手ぬるさあるいは利己的な行動である。その影響は、数十万にのぼるわれわれ人類の一部の犠牲者と、とりかえしのつかない気象異変とである。より安くより大量に肉を食おうと思うまえに、あるいは、より確実に電力を確保するためにウラニウムを探そうと思うまえに、だれか会ったこともない知らない人びとがサハラの内辺をまずは自分の口を糊するためにだけせせと農耕や牧畜にはげんでくれているおかげでわれわれの気象は変化せずに安定した生活を送ることができるといふ発想はできないのだろうか。

第二のエピソードに移る。エネルギー政策が、日本のなかでどのような問題をひきおこしたかについてのエピソードである。日本の森林では、最近、松くい虫の被害や樹木の共倒れ現象などが進行している。森林がわれわれの生存にとってどれほど大切なものであるかは、食物連鎖など地球上の生態系を考慮すれば、説明を要さない。ここでも、現在、日本で進行している森林の衰退現象が、自然か人工か、その原因や影響がわれわれ国内社会だけのものかいなかを検討する。エピソードを示そう。

森林は、酸素を供給するとか思索やいこいの場を提供するといったいわば存在するだけで有する価値以外に、生活の資源として主として三つのものを提供してきた。燃料、肥料、用材（建材・パルプ材等）である。ところが、われわれが「近代化」の道を選択して以来、とくに戦後の高度経済成長期以来、こうした三つの要素は、国内の森林に対しては、あまり熱心に求められなくなった。

安い石油をどんどん輸入して、そのうえにのった経済成長政策がとられたため、それまで薪炭に依拠していた農山村でも、生活用燃料を石油やプロパンに転化した。そのために、それまで必要にに応じておこなってきた山林

の下枝はらいや、おちた細かい枝を集める作業などが顧みられなくなった。肥料は、袋づめにされて効率がよく機械化にもマッチした石油を主原料とする化学肥料がより多く使用されるようになり、落葉の堆肥を使うというまどろっこしい方法は年ねん放棄されるようになった。建築用には、安い熱帯産の外材が輸入されるようになり、七〇年代には、外材と国産材との比率は逆転し、今や三分の二以上を外材でまかなっている。

このような事態が進行したために、国内の森林は顧られることが少なくなり、薪炭・建材などで現金収入をえていた人びとは、山林を放棄して都市へ流出し、また、都市では二次・三次産業にこうした人びとをかかえこむ余裕と必要とが存在していた。そのため山林を守る人びとはますます少なくなり、機械化・合理化をはからざるをえなくなり、一層、山村における雇用の機会は低下した。また、こうしたことのために、ますます外材に頼らざるをえなくなっていく。

松食い虫の害がでると、かつては、薪炭の必要から、たった一本被害をうけても、それとばかりに切り倒して、薪にしてしまった。ところが現在では石油やプロパンを使うために薪をそれほど必要とせず、倒木を切っても使い道がないために、いきおい放っておかれる。松食い虫の被害は群をなして広がる。落葉ひろいや下枝はらいがおろそかにされるから一本一本が弱くなったうえに、大風などで一本倒れると下枝が他の木までひっかけて共倒れ現象がおこる。ところが山村の人口は少なくなっているために、ケアができないうえに、山林が保護できなくなって、山が水を保てなくなる。鉄砲水がおきるし、下流の都市部では夏場の水不足が年ねん深刻になる。

一方、かつて優秀な山林保持国だった日本は、いまや世界の輸出用木材の約三分の一を輸入する木材輸入大国になった。そのうち、約半分は東南アジアからくる。熱帯の森林はものによっては育ちが早いという利点をもつと同時に、森林が深くかつ植林がきかないという欠点をもつ。日本の経済成長のスピードにあわせて木材を供給してき

た東南アジアの諸国は、いまや鉄砲水や大洪水におそわれている⁽⁵⁾。

第一のエピソード、第二のエピソードとに共通しているのは、地球的思考の欠落である。ある種の活動が、地球的影響力をもつにもかかわらず、それを考慮していないか、考慮していても、それでよしとする態度に貫かれている。あるいは、ひとつの目的——たとえば、石油をエネルギーの基礎として高度工業化社会へ脱皮する——のために、他を犠牲にしてはばからない政策である。

第三のエピソードに移る。一九八一年一月に川崎市でアジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議が開催された。そこに参加したアジアの作家のなから八名の出席をえて、NHKが、「アジアの作家・祖国の心を語る」と題する座談会を放映した⁽⁶⁾。その席上、堀田善衛は、帝国主義・植民地主義の打破、文化の発展、平和の維持のためには、政府のレベルではなく民衆のレベルで間断なく話し合いを続けていくことが是非必要だと語った⁽⁷⁾。そのため、彼は作家だから作家同語り合うことが肝心だと考え、アジア作家会議の開催にこぎつけた。これが、そのご発展して、地域をアジアから、アラブ、アフリカ、ラテンアメリカへと拡大し、作家だけではなく広く文化人を集め、八一年のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の開催をみたのである。

その途上、一九六三年にカイロでザイルのジャーナリストと会ったときの話を、この夜のNHKの番組の結論として語っている。それによると、そのザイルのジャーナリストは、日本人である堀田善衛に泣いてあやまったという。なぜなら、広島・長崎におとされた原子爆弾の材料となったウラニウムは、ザイルから掘りだされたものだった。もし当時、ザイルがベルギー領コンゴという植民地でなく独立国であったら、そんなことは決してさせなかった。日本人にあつたらこのことを是非あやまりたいと思っていたということであつた⁽⁸⁾。

この話をきいた時に筆者は、形容しがたい感情のために体が小さくなる思いがした。ひるがえってわれわれの日

本はどうだっただろう。一九五〇年に勃発した朝鮮戦争の初期の段階では、たしかに日本は占領下にあり独立していなかった。日本は、平壤など現在北朝鮮となっている地域の絨氈爆撃に従事した米空軍の基地となった。そればかりでなく軍需物資の工場の役割を果たした。

一九五二年四月二八日にサンフランシスコ平和条約が発効して占領政治は終結し日本は独立した。北爆を伴うベトナム戦争がもつとも激しさをくわえたのは、このはるかにのちの六〇年代後半であった。われわれは独立していた。なお占領下にあった沖繩からは連日B52が飛び立った。れっきとした独立日本の領土を通過して相模原の基地に運ばれた戦車は、そこで修理されて再びベトナムの戦場に向った。

また、近年、原子力発電は、日本のエネルギー確保のためにという理由で石油ショック以後一層拍車がかけられている。これまで人類は、原子や分子の安定的結合で生ずるエネルギーにエネルギー源を求めてきた。原子力はこれとはまったく異なる発想から出発している。原子の不安定な状態にその源を求めている。その廃棄物は、これまでわれわれが身近に経験してこなかった危険性を蔵している。それを太平洋に投棄しようとする計画をわが国はたてた。しかも、太平洋の住民のたび重なる反対を押し切つてである。

この第三のエピソードに共通するのは、想像力の問題である。自分の見えない所で自分の行為によってなにが起っているか。自分がある種の行動をとらなかつたことよってなにが起っているかを生き生きと頭の中に描く力が問われている。地球的問題群の世界に生きる人類の想像力である。地球人の想像力といいかえてよい。

(1) 西川潤『飢えの構造』(ダイヤモンド社、一九七四年)二二九頁―三三〇頁。もっと詳しく紹介すると、第一に、「これらの国の政府が独立後、フランスなど旧宗主国と結んで、都市優先・行政機関優先の発展路線をとったことである。(中略)どこでも政府予算は独立後膨大にふえたがその大部分は政府の経常費用であり、投資予算にしても生産的投資に向けられる

比率はごくわずかである。」とりわけ「農村は顧みられさえせず、もちろん灌漑・水利計画などは全くといってよいほど行なわれなかった。」第二に「政治的独立後も経済的には、かつての植民地制下に形成された奇形的農業発展をそのまま続けるところになった。（中略）独立後もこのモノカルチュアを基礎とした分業的發展パターンには何らの変化ももたらされなかったから、いったん食糧生産地帯が何らかの理由で打撃を受けると、その影響がたちまち西アフリカ全域に及ぶことになった。」第三に、「輸出用の落花生、トウモロコシなどのモノカルチュア栽培は急速に地味を奪い、土地を荒廃させる。木材の組織的な大量伐採はかつて緑の豊かだった西海岸を裸にしてしまった。またサヘル地帯での家畜の飼育はわずかしかない草をたちまちなくしてしまい、土地の侵食と砂漠化を急激に進めている。こうした環境の破壊、掠奪のために雨が降ってもこれをためてやがて蒸発させ、再び雨を降らす貴重な媒体である緑の草木がだんだん姿を消し、それが洪水を招いて土地のわずかな有機質を流失させ、また土壌を破壊する。そしてこうした環境の破壊を食いとめるべき基礎的な投資も行なわれないから、毎年砂漠は何万ヘクタールという可耕地をのみ込みながら、すさまじい勢いで拡大している。」

(2) 坂本義和「国連大学と日本人」『朝日新聞』一九七五年二月一七日付夕刊、文化欄。同『平和——その現実と認識』（一九七六年、毎日新聞社）「まえがき」ii頁～iii頁に再録。原文通りに紹介すると、「この両三年、アフリカのサハラ南部地域の諸国では、数十万をこえる住民、とくに遊牧民が餓死した。先進国での通説は、この原因は『ひでり』であるといひ、国連文書の多くもそう説明していた。だがアフリカの現地の研究者の説明は異なっていた。彼らによれば、これら諸国が欧州共同体（EC）の市場に組み込まれるにつれ、遊牧民らが牛の増殖を図り、ふえた牛が牧草を食べつくしたために、急激に土地が砂漠化し、大量の牛と遊牧民が餓死することになったのである。アフリカの声を代表する経済学者として知られるサミール・アミンは『ECの人間がそんなに肉が食べたいなら、いっそ遊牧民の肉を食べるべきだったのだ』と憤怒をこめて語ったことがある。

同じころ、西アフリカのセネガルでも多数の餓死者が出た時、先進国での通説は、それは『ひでり』が原因だと説明して

いた。だが現地の見方によれば、農民が肥料等を買う資金もないままで、欧州に輸出する落花生を特化して増産したため、土地が急速にやせて砂漠化したのであった。これも天災というよりは人災であった。」

(3) 那須国男『アフリカの誘惑』(一九七七年、ダイヤモンド社) 二二四頁。Cf. TAGA Hideshi, 'Japan and Africa: The Need for Reconsideration,' *Peace Research in Japan*, 1977-1978 (March, 1978) 69.

(4) 国産材と外材との比率の推移については、国土庁編『国土利用白書』昭和五七年版、二〇頁に、林野庁の「木材需給表」にもとづくグラフ「図1-1-6 木材(用材)供給量の推移」が掲載されており、そこに、昭和三六年から昭和五五年にいたる数値が示されている。それによると、昭和三六年の自給率(用材中国産材の占める百分比)は、八二・五%、昭和四四年に大小が逆転し四九・〇%、昭和五五年には三一・七%となっている。

また、国別輸入実績については、同書ならびに、農林水産省統計情報部『ポケット農林水産統計』昭和五七年版、三三四～三五頁。後述松くい虫の被害については、農林統計協会『図説林業白書』昭和五五年版、九四頁「表IV-5・森林病害虫等による被害」など参照。

(5) 「……あの割りばしのなげない使い捨てが、アジア、特に東南アジアの人びとの平和な生活をおかしている(中略)。一年間に日本人が使い捨てる割りばしの総数量は、家20万軒分にあたるそうです。その規模の材木使用量は、日本人が東南アジアから輸入する材木のごく二部でありましょう。しかしながら、割りばし一ゼんの使い捨てにしても、東南アジアの自然破壊につながり、現地の人びとを脅かしているのです。」という発言もある。越田前出「忘れられた植民地」八八頁。

(6) 一九八一年一月二三日、午後七時半～八時四五分。NHK教育TV「アジアの作家・祖国を語る」。出席は、針生一郎、シム・ウースン、マニユエル・パンビッド、テブシリ・スークソバ、アイブ・ロシデイ、カシーナート・シン、フランシス・シオニール・ホセ、堀田善衛。なお、AALA文化会議自体については、日本アジア・アフリカ作家会議編『民衆の文化が世界を変えるために——アジア・アフリカ・ラテンアメリカ文化会議の記録』(恒文社、一九八二年)を参照せよ。

(7) 堀田のこの発想は、以下に示すユネスコ憲章の前文の部分と酷似している。「政府の政治的及び経済的取極のみに基く平和は、世界の諸人民の、一致した、しかも永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって、平和は、失われたいためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない。」

(8) 堀田善衛がプログラムの冒頭で語ったのはつぎの通りである。(しゃべったものをそのままおこしたので、つなぎのコーバや間投詞がいくつもはいつている。それらはすべてカタカナで小さく書いた。その点に配慮して読まれたい)。「エ、日本の戦時中に私は中国の上海にいたことがあります。そして、そこでつまり戦時中にすけどもつくづく考えましたことは、こういうツマリ、ユー侵略戦争やデスネ、それから、コーノ人の所へ押しこんでいたりデスネ、そういうことを、ツマリやめさせる、つまり帝国主義、あるいは植民地主義っていうものを、コーノ打破するためには一体どうしたらいいものかっていうことを私よく考えました。デ、それで、マア、そのときに考えたことはデスネ、政府レベルではなくって、ツマリ、アジアやアフリカのデスネ、民衆レベルで、コーノ間断なく、コーノ話し合いを続けていくことが是非必要だっていうことを痛感いたしました。ソレデマア戦争が終りましたから、どうやったらそれが実現できるだろうかっていうことをよく考えまして、ソレデそれがマアようやく一九五六年に、ユーニューデリーで第一回目のアジア作家会議っていうものを開くことができました。まあ作家ももちろん民衆の一人ですから、そういうコーノ作家たちを通して話し合っていくことがどうしても必要であるトイウデスネ。そしてマアその二年後に一九五八年にアジア・アフリカ作家会議っていうものをアフリカまで広げて、コーノ作りあげることができて、それからまあ二五年たちましたけども、やはり、ツマリ文化の発展、あるいは平和の維持デスネ、のためには、ユーみんなで話し合っていく必要がどうしてもあると思うんです。ユーキょうは、ユーアノなんんかのアノアジアの作家たちと一緒に話しをすることができまして、これからの話し合いを楽しみにしています。」

おなじくしめくくりで語ったのはつぎの通りである。「マア私は、私自身がなんとかいうよりもデスネユーこの番組の視聴者と一緒にツマリきいてユーいるつもりでここにおりましたデスガマアやはり大変おもしろかったと思います。そしてユーマア各国におけるいろいろな状況、それからマアあるいはツマリ日本の近代化、工業化に対するご批判、そういうものはやはり

非常におもしろかったと思います。そしてとくに、ニーゴ出席ニをいただきましたみなさんはみな非常に若いんで、ニーゴしてツマリ各いろいろな分野でマア非常にがんばっていらっしやる。これがアジアの希望だろうと私は思います。そしてマアエーこのアジア・アフリカ作家会議の運動を私ヒキツッー始めましてからずい分長い時間がたちましたけれどもエそのなかでエーひとつだけツマリー日本の視聴者のみなさんにお伝えしたいと思うエピソードがひとつありましたんでエーそのことをツマリこれエ今までの話し合いとあんまり関係ありませんけども、申し上げてアノーしめくくりにしようと思います。私、一九六エー三年でしたかに、カイロであるコンゴのジャーナリストに会ったことがあります。アフリカのコンゴですネ。ソノこのジャーナリストはデスネ、エー私が会うまで日本人というものに会ったことがなかつたらしいんですネ。そしてこのジャーナリスト、私が日本人であるとわかりますとネ、私を部屋の隅の方へ押してつてデスネ、エーなにもいえないんですネ。そして涙が急にでてきました。それで私が非常に驚いたんですけれども、エーそのコンゴのジャーナリストがいうにはデスネ、私は日本人にあやまらなりたいと、涙を流しながらいうんですネ。それには私も驚きましてネアフリカのコンゴの人が日本人にあやまらなければならん理由はどこにあるかと疑いましたけれども、それは、つまり、コンゴのコーカタンガのデスネ、エーウラニウムのである鉱山、その鉱山からでたソノウラニウムがデスネ、これが原子爆弾、広島・長崎の原子爆弾のもとになったっていうんですネ。しかしわれわれはそのときツマリベルギーの占領下にあつて、その鉱山を管理してることができなかった。ネッそれでもしわれわれがツマリエーそのときすでに独立を達成していてその鉱山をウーン自分達の手で管理していたら、決してエーツマリ原子爆弾を作るための、にッ、コーノ自分の国からそういうものを輸出したりすることはなかつたらうというんですね。そのことが心のこりです。日本の人に会うことがあつたらそのことをいいたかつたという話をしました。やはり、ツマリアジア・アフリカのソノ一連帯というものがエー平和を保障していくために非常に大事であるということ、このことをやはりそのときに私はエー大変感銘をうけました。マアエー全然ツマリ違つた場所の話をしてアジアの作家達の話し合い、ツワッツワッにしめくくりをつけるというのも多少おかしいかと思ひますけれども、感銘深い話だと思いますので、結論としておかせていただきます。

(9) 想像力については、大江健三郎『核時代の想像力』(新潮社・一九七〇年)を参照せよ。

ここまでのおまとめ⁽¹⁾

当面する新潟大学における平和論の手がかりを与えるためにここまで書いてきた。平和論が平和教育の一環であり、しかも具体的には、対話にもとづいて地球人を育成する教育であることをあきらかにした。地球人というコトバでなにを意図しているかは、三つのエピソードから漠然と把握できよう。

地球人とは、意識のうえでこれまでの国際人とは異なる。地球的問題群にとり囲まれた現代世界において、そのアイデンティティを「^{ヒューマニティー}人類をいくつもの猜疑心にみちた集団に隔離し、相互恐怖へと駆りたてる」⁽²⁾ 国家にではなく、地球社会、人類全体へよせうる者である。日本人と思うまえに、人類の一部と思う感情を優先させる人間である。このような視点から逆に、地球的問題群やそれより低いレベルの問題の解決を考察する人間。地球的思考力を身につけて、平和的変革の志向をもつ人びとである。

必要とされるのは想像力である。決して、「日本型国際人」に期待される英語をペラペラ話す能力や、銀ブチメガネ・アタッシュケースなどが第一義的に要求されてはいない。想像力とは第一に身近に起っていること、身のまわりの日々の生活を見ただけで、地球を貫き通してその裏側でそのことに関連して同時になが起っているかを見ぬくのなかに描きうる能力。第二に、身のまわりと目に見えない所で起る事象をつないでいる仕組みはなにかを見ぬく能力。洞察力といいかえてもよい。第三に、現在起っていないけれども、もし起きたら地球がどうなるかを想像する力。現在地球上にある核兵器を動員して核戦争が起きたら一体地球がどうなるか。環境汚染がこれ以上進んだらどうなるか等々を、ヴィヴィッドに描くことのできる力である。第四に、では、いかなるオルターナティブを創造し

選択するかを決定する力。構想力である。ほかにあげればきりがない。こうした能力を育成することを当面、平和論の目的としてかかていきたい。これまでに蓄積されてきた知識の土壌に地球意識という種子をまく作業でもある。⁽³⁾ そのためには、教師も学生も、想像力によって培われた自己の頭のなかにある複数の「現実」を思いきり出しあわなければなるまい。こうした文脈からは、想像のなかにこそ、頭のなかにこそ、より「リアルな現実」がまつているといってもいいすぎにはなるまい。

（1）「ここまでのまとめ」とするのは、本稿につづいて、平和・戦争・環境・人権等各論的資料解題をならかの形で提示する予定である。

（2）馬場伸也「国家の陥穽——地方主義と日本の平和路線——」『世界』第四三三号（一九八一年二月号）一五三頁。

（3）平和論のカリキュラム、各論としてどのようなメニューがあげられるかについては、筆者の考えにもっとも近いのは、

G. Feller, S. R. Schweninger, and D. Singerman eds., *Peace and World Order Studies: A Curriculum Guide*, 3rd eds. (Transnational Academic Program/Institute for World Order, 1981) の項目のたて方である。もっともここでは、四〇〇以上のコース・シラバスにわかれる六四の項目があげられている。本学の平和論でそのすべてをこなそうとするのではもちろんない。このなかには、アメリカ中の大学や機関から集めて紹介されているために、相互に重複するシラバスもたくさんある。しかし、全体として、ステート・セントリックなアプローチを否定して、グローバル・セントリックなアプローチへ移行しようとする志向性と、同時に、既成の社会科学への痛烈な批判意識に貫かれている。

また平和学のメニューについては、日本学術会議が政府に対して行なった勧告で示された「平和研究講座」メニュー⁽⁴⁾がある。ここでは、人権や環境問題の視点が欠落しているように思われる。また、思想史、戦争や軍備、軍縮については詳しいが、南北問題についてはやや弱いという観がいなめない。岡倉古志郎「平和研究の振興に関して日本学術会議が政府に行なった勧告」『日本平和学会編』『平和研究』第2号（一九七七年）一七五頁〜一七六頁、メニューについては一七八頁、参照。